

## コロナ第7波と戦う救急現場、医師「軽症重症の区別は意味ない軽症でも生死のはざまに」

9/2 読売新聞

新型コロナウイルスの「第7波」では、かつてない速さで感染が広がり、救急医療の逼迫ひっばくを招いている。医療現場では何が起きているのか。最も高度な3次救急を担う京都第二赤十字病院（京都市上京区）を訪ねた。（上村真也）

「やっていることは第1波と同じ」



コロナ病棟では看護師たちが慌ただしく行き来していた

コロナ病棟となっている4階フロア。ガラス越しに見える患者の大半は高齢で、寝たきりの人も多い。看護師たちは、部屋に出入りするたび、防護服を着脱し、医療機器をアルコールで丁寧にぬぐう。「陽性者がこれだけ増えても、やっていることは第1波と全く同じなんです」。表情には疲労の色がにじむ。

取材した8月25日時点で、入院するコロナの陽性患者は17人。コロナ用に確保している病床はいっぱい、日によっては20人を上回る

多くはいわゆる「軽症者」だが、言葉から受ける印象と実態は異なる。救急科副部長の成宮 博理ひろみち 医師（48）は、「軽症／重症」の区別は、あまり意味がないと話す。コロナ自体の症状が軽くとも、誤嚥ごえん 性肺炎や心不全といった持病が悪化し、生死のはざまにある事例も少なくないからだ。全国で連日多くの死者が出ているのも、こうした理由によるところが大きい。「コロナだけでなく、人間トータルで診る必要がある」と強調する。

パソコン画面で病床の運用状況を見せてもらった。全く空き部屋がないわけではない。ただ、「脚をけがして入院している人の隣の部屋に、せきをしている隔離解除直後の患者を入れられるか」というと、感情的に受け入れてもらえないと思う」と成宮医師。加えて、体力の落ちている高齢者が多く、10日で退院となるケースはごくまれだ。7月下旬から長期入院している人もおり、限られたベッドの回転はすこぶる悪い。

府内の病床使用率は60%前後で推移しているが、複数の病院の関係者は「実際はすで

に飽和状態」と口をそろえる。

### 状況は危機的

適切な医療を、適切なタイミングで施す——。そのためには、迅速な搬送が欠かせない。ところが、第7波では搬送を断らざるを得ないケースが多発し、それもままならなくなっている。

京都市消防局によると、救急出動は7月25日、427件に上り、1日の出動数として過去最多を記録。119番した人の搬送先がすぐに見つからない「救急搬送困難事案」は、同日からの1週間で過去最多の185件（うちコロナ疑い67件）に達した。8月に入っても同様の傾向が続く。

第二赤十字病院も、入院医療コントロールセンターを通して多い日で7、8件のコロナ患者の受け入れ依頼がある。加えて救急車での搬送依頼は1日30件を超えることも。十数件拒否された人や、大阪、兵庫から運ばれてきた人も受け入れているが、ベッドの空き状況などで断らざるを得ないこともあるという。

救急搬送体制は、コロナ禍が始まる前から厳しさが指摘されており、コロナ疑いによる搬送が上乘せされた今の状況は危機的だ。市消防局は、救急隊を呼ぶべきか迷う場合、「救急安心センターきょうと」（#7119）を利用するよう呼びかけているが、「もっと早く呼んでいれば」というケースも少なからずあるといい、情報発信のあり方にも苦慮している。

### 「力貸して」

同病院を含む府内の医療機関は8月15日、ホームページで府民に向けて異例のメッセージを出した。

〈感染拡大が災害レベルに達している。特に救急医療はすでに崩壊と言っていい状況〉  
〈コロナ以外の診療も多大な影響を受けており、手術や入院の停止・延期という事態となっている〉

そのうえで、不要不急の外出を避けることや、会話時のマスク着用を呼びかけた。府民に「自粛」を求める内容だけに、関係者の間でも議論はあったが、最終的には、協力を求めざるを得ないという意見で一致した。

成宮医師は言う。「患者さん一人ひとりを、適切なタイミングで診る。そんな当たり前の環境を、この2年半で崩してしまった。第7波は想定以上で準備が不十分だったという反省もある。でも今は、少し力を貸してほしい」